タイ王国　　派遣期間 2013 年４月～2016 年３月

バンコク日本人学校　実践報告

～タイ国における子どもたちの教育環境について～

札幌市立前田中央小学校
教　諭　　數野　　陽子

1　バンコク日本人学校における教育環境について

バンコク日本人学校（泰日協会学校）は、1974 年（昭和 49 年）に、日タイの友好・親善・協力団体である「泰日協会」が母体となってタイ国政府に申請され、タイ国私立学校法の適用を受け、タイ国政府から正式に義務教育学校として認可を得た。

現在、創立 61 年目を迎え、世界に 88 校ある日本人学校の中でも、歴史的にも伝統的にも最も古く、児童生徒数は（平成 27 年４月 20 日現在）小学部 2,292 名、中学部 631 名、合計 2,923 名の超大規模校である。スタッフも日本人の教員 149 名、タイ語・英会話ネイティブ教師等 36 名、合計 185 名。小学部 71 クラス、中学部 18 クラス、特別支援学級３クラス、合計 92 クラスの学校となっている。児童生徒数の増加を抑えるために、H 26 年度より国内にある姉妹校のシラチャ校と学区制を引いている。

【特色ある教育活動】

バンコク日本人学校は、同一敷地内に小学部・中学部を併せもつ大規模在外教育施設である。また、タイ国学校法に基づくタイの私立学校でありながら、タイ教育省から日本の文部科学省が定める「学習指導要領」に準じて教育課程を編成することが許されている。

⑴ 土曜登校日

小学部４、５年生は月１回、小学部６年生と中学部は月２回の土曜登校日を設定し、授業時間を十分確保するように努めている。

⑵ 小中併設を生かした指導

小学部 3～6 年生	英会話の授業においては、中学校での英語指導の経験をもつ教員が授業に加わり、児童が安心して授業が受けられるようにしている。
小学部 ５年生	理科・図工・家庭科にも専科教員を配置している。また、算数科では、１学期は TT（ティームティーチング）、３学期は習熟度別少人数学習を導入して、個に応じたきめ細かな指導の充実を図っている。
小学部 ６年生	教科担任制を導入して、より専門的な学習指導を展開している。中学校での学習へ円滑に接続できるようにし、小中一貫して学力向上ができるようにしている。
中学部 １年生	各教科において、基礎・基本の定着と個に応じた指導に力を入れて、学力の向上を図っている。

⑶ 海外（タイ）ならではの指導

日本語力の保持・向上

小学部全学年で、朝学習の時間を使って「日本語特別（ことばの時間）」の指導を実施している。主な内容は、漢字や言葉のきまり言語事項の復習や作文等表現力の向上をねらいとしたものである。また、「朝の読書タイム」を設定し、本に親しみ、進んで読書に取り組む態度を養っている。図書館や学級文庫には、合わせて５万冊以上の蔵書があり、子どもたちはいろいろなジャンルの読書を集中して行っている。

水泳指導・体力づくり

常夏の気候を生かし、１年を通して水泳授業を実施している。担当する教員と水泳コーチが一緒に指導しており、高い泳力を養うことができる。その泳力を試す場として、小学部５年生では、チャアム臨海学校で遠泳を行っている。また、体力づくりの一環として、各学年で学期ごとにスポーツ大会を開催するなど、工夫を凝らした取組を行っている。

タイに住むよさを生かした学習の展開

小学部１，２年生の生活科の授業、また３年生以上の総合的な学習の時間や社会科の学習においては、タイ国の歴史や自然・文化、タイ進出の日本企業等のよさを最大限に生かせるような学習を展開している。それぞれが設定した課題を、生の情報に触れながら追究することができるので、より深い問題解決学習ができる。また、現地心身障がい乳幼児施設等へのボランティア活動に全校あげて取り組んでおり、タイ国理解にもつながっている。

⑷ 異文化・多文化コミュニケーション

タイ語

タイ教育省よりタイ語の授業が義務付けられている。本校では、小学部１年生から週１時間実施している。日本語が堪能なタイ人教員により、片仮名表記にしたタイ語の教科書を使って、会話を中心に指導している。なお、タイ語をより深めたい生徒については、中学部の選択授業でタイ文字を習うことができる。

英会話

小学部３年生以上で、国際理解学習の一つとして、週に２時間、英語のネイティブスピーカーにより、アメリカの大学が編集したテキストを使って、ティームティーチング方式で英会話を指導している。また、日本人会では、英語検定をバンコク校で受検できるようにし、たくさんの児童生徒が挑戦している。

⑸ 国際理解教育・現地理解教育

修学旅行（小６・中２）

小学部６年生はチェンマイに行き、ドイステープ寺院、エレファントキャンプのほかに現地校との交流や、現地家庭訪問などがある。中学部２年生は、シンガポールにて、現地学生と共に市内を回り、英語を用いて交流したり、班別活動をして自分たちだけで様々なところを巡ったりする。

チャアム臨海学校（小５）

チャアムで２泊３日の臨海学校を行う。水泳授業の成果を発表する遠泳や「砂の芸術祭」は伝統行事である。

交流学習会

タイの学校やインターナショナルスクールと交流する。たどたどしいタイ語や英語に身振り手振りを交えて、自分の思いを伝える。子どもたちは、物事に対する考え方の類似点や相違点に気付き心を大きく成長させている。

校外学習・国際理解講演会

校外学習は、全学年で行なう。小学部１・２年生は生活科の一環として、小学部３年生から中学部は社会科や総合的な学習の時間の一環として、タイの伝統文化に触れる学習や、保護者の働く日系企業や政府開発援助などで作られた公共施設を訪問する。国際理解講演会は、中学部１年生を中心に、タイの第一線で活躍されている日本人の話を聞く。これらの学習を通じて、国際人とは何か、国際理解とは何かを考えるとともに、自分自身の在り方や生き方を探り、日本人としてのアイデンティティを培っていく。

⑹ 進路指導

キャリア教育の推進

中学部では、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付けて欲しいと考え、進路啓発講演会や職場訪問学習など、職業を通して自己実現を果たしている多くの方々との触れ合いの場を設けている。

進路相談室の設置

高等部を併設していないため、中学部卒業後、様々な進路へ向かっていく。中でも、学校選択は人生の一つの岐路であり、未来を切り拓く第一歩である。事務棟２階に進路相談室を設置し、様々な個人相談に対応するために、進路相談担当者が常駐している。

進路情報の提供

進路相談室では、各都道府県の公立高校の入試情報をはじめ、帰国子女を受入れる学校、主な私立小・中・高の情報、タイ国内外のインター校の情報をファイルしている。そして、『進路通信』を通じて、進路情報を提供している。

懇談会・学校説明会の開催

中学部３年を対象に年３回の懇談会を開催している。また、帰国子女を受け入れる学校、海外入試を実施している学校などの説明会を開催している。いくつかの日本の私立学校がバンコク校で入学試験を実施している。

【教育活動における課題】

⑴ 教師の質的向上

上記の通り、バンコク日本人学校では、様々な特色ある教育活動を展開している。また教員間での研究・研修も盛んに行われており、たくさんの事を学ぶことができる。教育課程も私立学校ということもあり、日本の公立学校によりも自由に特色を出すことができるように思う。このようにハード面はかなりしっかりとしているが、問題はソフト面である。文科省からの教員派遣数が限られており、全教職員数の40%にも満たない。残りの60%余りは、学校採用教員である。ほとんどの学校採用教員は、大学を卒業した１年目もしくは２年目の教員である。学年の３分の２が学校採用教員であることがほとんどで、文科教員は彼らの育成も担っている。授業の力量や学級経営にも差が出てくるのが当然で、保護者対応をすることも多くなっている。若い先生方のやる気に満ちた様子はたいへん好ましいが、せめて、文科省派遣教員が60%を占めるくらいにまで派遣してもらえるようになると、教育活動がもっと充実してくるのではないかと考える。

⑵ 学習スペースの確保

年々、児童生徒数が増え続けているバンコク日本人学校では、教室や特別教室の確保が難しくなっている。私が赴任してからの３年間だけでも毎年工事が行われ増設されてきた。しかし、敷地にも限りがあり、今後の増設は難しい。現在、教室は何とか確保しているが、特別教室が足りないため、普通教室を音楽室や図工室として使っている。また、体育館やグラウンドでの学習も２学年が一緒に活動したり、時には、小学生と中学生がグラウンドで学習をしたりしている。当然、活動にも制限が加わってくるため、思ったような授業をすることができないこともある。また、体育の授業時数の確保も難しい状況にある。

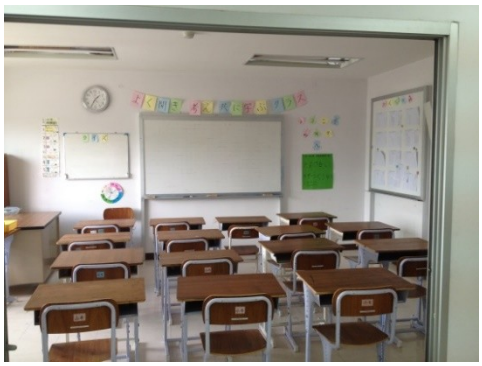
どちらの問題点も児童生徒数の多さからくるものである。保護者の中でも、あまりの人数の多さにせっかく日本人学校があってもそこを選択しないという方々も出てきている。海外での特色を生かしつつ、日本の教育をしっかりと行うことのできる教育環境の整備が必要不可欠であると強く感じる。

2　チェンマイ補習授業校における教育環境について

平成27年度の夏休みに、チェンマイ補習授業校に巡回指導に行く機会を与えられた。バンコクの北方約720キロに位置するタイ第２の都市チェンマイは「北方のバラ」とも称される美しい古都である。

チェンマイ補習授業校の在籍数は、小学部と中学部を合わせて57名で（平成27年４月現在）その他にも、施設内には、幼稚園が併設されている。総勢100名近くの日本国籍をもつ子どもたちが学んでいる。幼稚園以外のほとんどの子どもたちは、平日にタイの現地校かインターナショナルスクールなどに通い、毎週土曜日に補習授業校に通ってくる。

平成26年度まで使用していた施設は立ち退きとなったため、27年度よりビルの中の３Ｆのスペースを借りて授業を行っている。学年または、近接学年ごとに部屋を小さく区切り使用している。



【指導計画について】

夏休み中に行われた巡回授業に参加した児童生徒は、小学１年５名、２年４名、３年３名、４年14名、５年３名、６年１名、中学１年２名、２年２名、３年２名　計34名であった。参加したのは保護者や本人の学習意欲が高く、補習授業校の中でも比較的成績の良い子どもたちである。日本語によるコミュニケーションはきちんととれていたが、文章を書いたり読んだりする能力については個人差が見られた。

人数を把握した上で、補習授業校と連絡を取りながら、３日間（15時間）の指導計画を作成した。児童生徒の発達段階に応じた指導を行うために、小学校低学年、中学年、高学年・中学生の主に三つのグループに分けて指導を行うことにした。

計画を作成する際、具体的な教育指導として以下の二つを設定した。

⑴ 基礎基本の定着

国　語……音読・視写・漢字などの言語活動を扱った指導を行う。言葉遊びなども多く取り入れ国語への関心が高まるように工夫する。また、季節の言葉に触れるなどして日本的な感覚を育む。

算　数……具体物を用いた操作活動を多く取り入れ実践を行うことで、算数への興味・関心を高める。具体的な計算の仕方を繰り返し練習することで、基礎的な力の定着を図る。

⑵ 豊かな学習経験

生　活……日本の遊びを通して、日本の文化への理解を深められるように指導する。

社　会……歴史や地理など、調べ学習を取り入れ、情報を整理する能力を育む。

理　科……普段できない実験や観察などの体験活動を通して、理科に対する興味・関心を高める授業を行う。予想・実験・結果など、見通しをもって問題解決する力を高める。

体　育……ゲームや運動遊びを取り入れ、楽しみながら各運動の技能の基礎を育む。

音　楽……体を動かす活動を取り入れ、リズム感覚を養ったり、音の楽しさを体全体で感じたりできるようにする。また、日本の伝統的な歌に触れ、日本的な感覚を育む。

図画工作…共同作業をしたり、作製したものを鑑賞し合ったりして、ものづくりの楽しさを味わえるようにする。

【授業について】

巡回指導へは、バンコク日本人学校から４名の教員が派遣された。その４名で担当を振り分け、授業を行った。私は、５教科８授業を行った。その内容と様子については、以下のとおりである。

⑴ 国語

小４（４名）　「季節の言葉　夏」

最初に夏の言葉集めを行い全体交流の後、俳句指導、俳句作りへとつなげていった。子どもたちは、比較的多くの夏の様子を表す言葉を見付けていったが、１人の子どもだけ三つの言葉を書いた時点でうつぶせて泣き出してしまった。現地校では成績が良く、算数の問題を解くのも速い子であるとのことだったが、二重国籍のため日本語に対する苦手意識がとても強い子であった。学年が上がるにつれて、国語に関する差が大きく開いてくるので、授業作りをする際には配慮が必要かと思われる。

小３（３名）、小４（１２名）　「五色百人一首」

俳句作りからつなげて、短歌についての指導をし、五色百人一首を行った。２名の子が日本で経験したことがあり、数枚の札は上の句を読んだ時点で取ることができていた。ほとんどの子どもたちは、読み上げた句のひらがなを追って取っていたが、中にはそのひらがなを瞬時に読むことができない子もいた。しかし、子どもたちからは、授業後「負けたけど、おもしろかった！」と満足そうな声が多く聞かれた。

⑵ 算数

小１（５名）、小２（４名）　「ピザを分けよう」

導入で足し算じゃんけんを行い、その後円を貫く直線を１本、２本と引いていくと、円がいくつに分かれるかという問題に取り組んだ。導入の足し算じゃんけんでは最初はグー・チョキ・パーのみで三つの数字を足していたが、子どもたちの中から指を１本にしてみたり、３本出してみたりするようになった。最後には、両手を使って数字を出すようになり、段々と自分たちでレベルを上げてじゃんけんを楽しんでいた。直線を引いてピザを分ける学習では、ヒントを与えることによって３本の直線まで引いて考えることができた。

小３（３名）、小４（12名）　「ピザを分けよう」

導入で計算パズルを行い、楽しく問題を解いていた。その後、低学年と同じ問題で円を貫く直線を引いて、円を分けていった。最初子どもたちは、「１本だと二つに分かれるけれど、２本だといくつ？」という問いに「四つ。３本だと８個。４本だと……。」と、なぜこんな簡単な問題を出すのだろうと言いたげな様子で答えていたが、「２本だと三つにも分かれるでしょう。」という教師の言葉を聞いて、そこではたと考え出した。直線の交わり方によって円の分かれる個数が変わってくることに気付いた後は、夢中になって円を分けていった。

小３（３名）、小４（12名）　「１から９の数字を使って」

１から９までの数字を足したり引いたりする問題に２問取り組ませた。１問目のレベルは２年生程度だったため、比較的早く解くことができた。２問目の問題は、いくつも答えがある問題であったため、一つ解けると次のパターンの解答をするために皆真剣に取り組んでいた。最後にジャマイカという数字遊びのゲームを行った。

⑶ 理科

小１（１名）、小３（１名）、小４（４名）　「スライム作り」

まず、スライム作りのための材料についての説明をした。その際にホウ砂水溶液の取り扱いについて十分に注意をするよう確認した。その後作り方を説明し、１回目はみんなで一緒に作り、２回目は１人で作らせた。同じ分量で材料を量り取っても出来上がりが変わってくる。混ぜる際には、教員の補助が必要である。時間のある子どもたちは、出来上がったスライムで風船を作って遊んでいた。どの子もとても満足している様子であった。また、補習校の教員や保護者の方々もとても興味深く見学していて、材料についても細かい質問を受けた。

⑷ 音楽

小１（４名）、小４名）　「ボディ・パーカッション」

導入で「勇気100%」という歌を歌った。この歌は、ほとんどの日本の子どもたちが知っている曲である。しかし「聞いたことがある。」と言った子が２名だけであった。手拍子や掛け声を入れることで、楽しく曲を覚えて歌えるようになった。その後、ボディ・パーカッションの基本を行った。二つのグループに分かれて手と足を使ってリズム打ちをし、後半にリズム合奏を行った。そして、最後にダンスを汗だくになって踊った。どの子も体中で表現し、音楽の時間を楽しんでいた。

⑸ 図画工作

小１～中３　「すてきなペーパーショップ」

マーブリング、スパッタリング、スタンピング、デカルコマニーの四つの技法を経験させた。４人の教員で一つずつ技法を担当し、子どもたちはやりたい技法の教室に入ってペーパー作りを行った。一つのペーパーを丁寧に仕上げる子、全てを経験するために忙しく教室を回っている子など様々であった。時間を１時間しかとっていなかったため、子どもも教師も物足りないような気がした。また後片付けも大変なため、このような図工をする場合は、２時間の授業を設定すると

よいと思う。

【巡回指導を終えて】

同じタイ国内ではあるが、バンコクとチェンマイとの学習環境の大きな違いを感じた。日本と同じカリキュラムで学びたいと願っていても、その環境が整っていない。平日にインター校や現地校に通っているだけでも大変だと思うが、そのうえ土曜日も学習をしている。中には、他校に通わず、補習校のみの学校生活を送っている子もいた。本人もさることながら、保護者や地域の方々の並々ならぬ努力があってこそ成り立つのである。

そんな中で、補習校を運営する中での問題点も多々起きていた。母親がタイの方で、日本に帰国する予定のない家庭と企業の駐在員でいずれ日本に帰る家庭とでは、学習に対する熱の入れ方が違う。単に日本語が話せるようになればよいと考えている場合は、のんびりとした空気の中授業をできるが日本に帰ってからの進路を真剣に考えている場合は、ピリピリとした空気が漂う。地方都市では、学習塾もほとんどなく、受験の情報もなかなか入ってこない。バンコク日本人学校を拠点とした情報発信を願っている保護者が多くいた。

今や日本は、世界中に拠点をもち経済活動を行っている。その中で子どもたちがどう育っていくのかが大きな問題である。海外経験は、子どもにとって宝になると本当の意味で思えるような教育を受けられるよう、国・企業・保護者、そして、在住の日本人の方々が協力していかなくてはならないと強く感じた。

最後に、私が巡回指導に行ったのは夏であったが、冬の巡回指導の打ち合わせに行った担当者からうれしい知らせを聞いた。子どもたちが夏休みの授業をとても喜んでいたということで、その時の授業風景の様子を掲示していてくれているという。それを聞いた時に、また、子どもたちの嬉しそうな顔が目に浮かんできた。本当に参加して良かったと思える研修であった。

3　現地校における教育環境について

平成26年度には、タイ北部のチェンライにある２校の現地校を見学することができた。そこでの様子を踏まえながら、日本とタイの子どもたちの様子を比較してみたいと思った。

【タイの学校制度】

タイの学校制度は日本と同じで、小学校が６年、中学校が３年、高等学校が３年、大学が４年である。通常、中学校は中等教育１～３年、高校普通課程は中等教育４～６年と呼ばれている。現在の義務教育は、７歳から15歳まで、小学校と中学校の９年間である。７歳から12歳までの６年間が小学校で、授業料は無料である。

【バーンボングナムローン校（チェンライ）】

タイの北部、ドイハング山にある少数民族の学校で、26 年度は幼稚園児 40 名、小学生 55 名、中学生 33 名の合計 128 名が通学している。狭いグラウンドには、手作りのサッカーゴールやほとんど壊れたと言ってよいバスケットゴールなどがある。木造校舎２棟に加え、近年鉄筋の２階建ての校舎が建てられた。木造校舎では小学生が学び、鉄筋の校舎では中学生が学んでいる。

この学校では、主に日本文化紹介の交流を行った。新聞紙で兜を作ったり、残った新聞紙で玉を作り、玉入れをしたりして遊んだ。子どもたちは初めて見る兜に興奮し、「作って、作って。」とねだってくる。ほとんどの子どもたちは、人懐こく子どもらしい笑顔いっぱいで接してくるが、中には、怯えて一言も言葉を発しない子もいた。何を作っても笑顔を見せず、持たせてもすぐに置いてしまう。周りの子は「この子は喋らないよ。」と教えてくれたが、その理由までは詳しく分からなかった。ただ、この地区は昔からアヘンの栽培が盛んで、今でもヘロイン等の麻薬の売買がある。この学校に通う多くの子の親が麻薬に関係したことで、何かしらトラブルを抱えている。また、親からの虐待を受け、学校内の宿舎で暮らしている子も多いと聞いた。声を発することのなかった子も、何らかの問題を抱えているのだろうと思う。

【サハサートスックサー校について（チェンライ）】

2502（西暦 1959）年創立、今年 53 周年を迎える伝統ある学校である。当初は、アメリカンミッショナリーが創めたキリスト系学校で、寄付によって設立された私立学校であった。2538（西暦 1995）年末、赤字によって閉校することになったが、2539 年ラットモントリ文部大臣が視察され、その結果、授業料を政府が援助するなどの支援を受けて運営されている。日本の援助で建てられた校舎や幼稚園が隣接している。児童生徒数は、2600 人（26 年度）。およそ 80％が山岳少数民族（12 民族）で、20％が市内の子どもたちである。通学している子どもたちの民族は、アカ族･ラフ族･カレン族･リス族･ヤオ族･モン族･タイヤイ族･ラワ族･ジン族(中国国民党)･カム族･ワ族･タイ族である。

この学校では、３・４年生の学級でシャボン玉作りとスライム作りの二つの科学実験の授業をさせてもらった。子どもたちは、楽しくて仕方がないというような顔をして、授業に没頭していたが、担任の先生方は全く興味を示さず、ずっと携帯電話をいじっていた。日本では、外国人の先生が来て教室で授業をしている中で、担任が全く関わらないことはあり得ないことだと感じた。

【２校の見学を終えて】

今回、２校の見学を終えて、この国の教育について考えたことが二つある。

一つ目は、子どもたちが抱えている家庭環境の難しさである。バンコクにいると、どちらかというと裕福な家庭の子が目に入ってくるが、この国ではそのような子どもたちは一握りだ。ほとんどの子どもたちは、金銭的な問題を抱えながら学校に通っている。文房具や学習用具が揃っている子は稀であり、最低限の物で学習していた。それでも、「学校に来られるだけでうれしい。」という思いを全面に出している子どもたちを見て、物を大切にしない日本の子どもたちにこの現実をもっともっと伝えていかなければいけないことがあると思った。

二つ目は、学校自体の問題である。公立学校は、国からの援助が全く足りず、学習用具や校舎の不足、また教員数の不足と質の低さが目に付いた。教育を積み上げられていない結果が、悪循環を生み出している。

どちらの問題も国が教育に力を注ぎ、解決していかなければいけない問題である。外部支援も必要であるとは思うが、トップの人間が、一部の人だけでなく国民全員を育てることの大切さにもっと気付いていってほしいと願っている。

4　終わりに

今回、タイ国内の現地校を含む三つの教育環境について考察してきた。子どもたちを取り巻く環境は、いろいろある。しかし、どの教育現場にも共通して言えることは、教育を施す人材の確保と質の向上の必要性である。確かに、途上国の人々にとって、学校自体を確保することも難しい場合があるが、どんなに教室環境が整っていても、教師がいなければ学ぶことは難しい。日本人だけでなく、世界中の子どもたちがたくさんの上質な教育を受けられるよう、願うばかりである。自分自身としては今後も子どもたちや若い先生方に還元していけるよう、もっともっと研鑽を積んでいきたい。

―　参考文献　―

・バンコク日本人学校ホームページ

・「タイを知るための 60 章」（綾部恒雄・林行夫　編著・明石書店）

・「タイのこどもたち」（久島篤　文・学研）